

着物地が伝える日本の美しさ ～心をつなぐアップサイクル事業～

ひきち めぐみ
引地 恵

株式会社 WATALIS 代表取締役

2011年2月。私は地元宮城県亶理町の郷土資料館学芸員として民俗調査に関わり、「着物」というテーマで、古い時代の亶理を知る人達を訪ね歩いていました。当時の私にとって、着物は成人式や結婚式をはじめとした冠婚葬祭で着用する高価な衣装であり、亶理の人々の日常の暮らしとは遠いところにあるもののような気がしていました。しかし、聞き書き調査を続けるうちに、着物が持つ衣類としての役割を越えた価値に気づかされました。

かつて娘を嫁がせるための経済的負担は大きく、「娘を3人持つと、カマドの灰もなくなる」と言われていました。年頃の娘を持つ親は、結婚する際に持たせる家具や衣類などの「ジサンモノ」の準備を整えていきました。戦中戦後の物資が乏しい時代には、あちこち駆け回って頭を下げ、着物を仕立てるための生地を手に入れました。養蚕農家では出荷の際に自家用に繭を蓄え続け、糸や生地と交換したこともあったそうです。それぞれの家の経済状況に応じて、できる限りの支度をして娘を送り出したのです。

着物は箆笥が一杯になるように準備するものとされ、近所の人や親戚が箆笥を開けて、何をどれくらい持ってきたかを見ることができるよう、嫁ぎ先の縁側に運び込まれます。正装用の晴れ着、訪問着、附下げ、江戸褌、コート、羽織、帯などを一通り揃えないと恥とされていましたが、十分に持たせることができる家は少なく、義姉などから着物を借りて箆笥を一杯にし、結婚後、実家に帰る度に返却していた人も多かったようです。

昭和の中頃まで、家族が着るものはその家の女性達が仕立てており、縫うことは女性にとって生活の一部でした。持参した着物は一生の衣生活を支える

もので、繕ったり仕立て直したりして着続けるものとされてきました。「小豆三粒包める布は捨てるな」「裾切って、肩継げ」と言われ、小さな端切れも大切に最後まで使い切る再生文化が暮らしの中に根付いていたのです。

あるお宅で、80過ぎのおばあさんが箆笥を開けて「これ。私の嫁入りの時に、おっちゃん（母親）が繭から糸をとって、織って、仕立てて持たせてくれた着物。もう着ないけれど、元気を出したい時に眺めるお守り。こんなに立派な支度してもらったんだから、何があっても負けちゃいけないと思って生きてきたの。」と見せてくれました。そう語る彼女の横顔はまるで少女のようにいきいきと輝いていて、亡き母への感謝の想いが溢れていました。早朝の井戸や川からの水汲み、昼は炊事や農作業、夜なべ仕事での裁縫など布団に入るまで働き通しの毎日。自己主張をせず舅姑や夫に黙って従い、周囲への気配りを絶やさぬ生き方を求められるなかで、親が苦勞して揃えてくれた着物は「親の愛情の象徴」であり、「心の支え」であったのだと感じました。

調査結果を踏まえて、テーマ展「着物～思いを纏う～」を開催しましたが、東日本大震災の発生により、会期中に郷土資料館は閉館となってしまいました。そして、2012年、私は株式会社 WATALIS（2015年設立）の前身となる任意団体を立ち上げました。自分なりのやり方で、地域の女性たちから学んだことを形にし、発信したいと考えたからです。「WATALIS〈ワタリス〉」という名称は、宮城県亶理町の「WATARI」と“お守り”という意味の「TALISMAN」を組み合わせた造語です。長い年月をかけて培われてきた「感謝の心」「手仕事の



【引地恵氏のプロフィール】

宮城教育大学大学院教育学研究科卒業。大日本印刷株式会社勤務を経て宮城県亶理町職員となり、社会教育主事・学芸員として地域づくりや民俗調査に関わる。2012年3月に退職し、2013年4月亶理町に一般社団法人 WATALIS を設立。代表理事となる。2014年度 DBJ 女性新ビジネスプランコンペティション「DBJ 女性起業震災復興賞」受賞。2015年5月に株式会社 WATALIS を設立し、現職。地域に受け継がれる返礼文化や感謝しあう価値観・縫製技術をものづくりを通して発信。着物地の価値を高めて再生し世に出すことで、アップサイクル文化の醸成を目指す。亶理町史民俗編調査・執筆者。内閣府地域活性化伝道師。

技「再生文化」という地域の宝を形にし、お守りのように大切に人から人へ手渡していきたいという思いを込め、着物地の「アップサイクル」による伝統文化の伝承と発信を続けています。

着物の生地に描かれたさまざまな文様には、その一つひとつに、「この布を使う人が幸せでありますように」という願いが込められています。中でも縁起が良い幸せのしるしとして愛されてきた「吉祥文様」は、纏う人の幸せを祈り願う心が日本人の繊細な感性と表現力によって個性豊かなデザインとして可視化され、日本固有の芸術へと昇華したものです。おめでたいとされるモチーフや主題を意匠化した美しい文様たちは、婚礼衣装に限らず晴れ着や外出着、日常着にも用いられ、女性の着物を彩ってきました。

しかし、衣生活の変化とともに着物を着用する機会は減ってしまいました。昭和30年代に入ると、既製品の洋服が地方にも広く流通するようになったため、使われないまま箆笥に眠っている着物も少なくありません。いま、日本中の箆笥には、技を尽くし、想いが込められた着物がたくさん眠っています。衣類としての役割を終えていても、それはただの古い布ではなく、一枚一枚に纏う人の幸せを願う限りない心が込められた品です。

私たちは、これまで延べ約10tの着物地を回収し、リメイクしてきました。古い着物の中には、現代の女性の体格に合わない小さなサイズのものや、小さなシミや穴があるものなど、着るのが難しいコンディションのものが多く含まれています。このような古着は、裁断してウエ

スにしたり、繊維に戻して軍手に加工するなどのリサイクルも行われていますが、コストが高いため取組みが進んでいないのが現状です。小物などにリメイクすることで、こうした状態の着物地に新しい活躍の場を与えることができます。こうしたアップサイクル事業は、微力ながら、衣類の廃棄量を減らす一助になっていると自負しています（環境省 環境ビジネスの先進事例に採択）。

着物は「日本の美しさ」の象徴であるとともに、時を越えてたくさんの「愛情」や「感謝」を伝えてくれるものでもあります。丁寧な手仕事で仕立てられた、美しい色柄の着物たちは、見る人の目を楽しませてくれます。これからはちょっと昔の「日本の美しさ」を今に繋ぎ、身近な人や日々の暮らしを大切にする生き方を、沢山のの人に手渡していきたいと考えています。



写真 1

〈菊文〉「延命長寿」「若返り祈願」「健康祈願」菊は抗老の力があると信じられ薬用にされていました。また、百草の王にして延命長寿の瑞兆花とみなされています。

（出所：株式会社 WATALIS）



図 1

役割を終えた品をリメイクし、価値を高めて再び世に送り出す。持続可能であることを目指したサステイナブルなものづくりの新しい手法で、素材を原料として考える「リサイクル」とは異なる考え方です。